富山新聞社賞

高岡市立成美小学校　六年　古市　夏波

「神明社に込められた思い」

令和五年四月二十九日、この日私の祖父母が住む地域にある神明社という神社のお祭りがあり、私はそこで「豊栄の舞」を披露した。

神明社は、とても小さい神社で神様のおられる祠以外は、ほぼ何もない。通学路の途中にあり、毎日神社の前を通っているが、これまで私は気にとめたことはほとんどなかった。「巫女舞をやらないか」という話をもらったときには、「こんな古い神社でお祭りがあるなんて本当かな。」と思った。

私の町内には「結ネット」というアプリが導入されていて町内の自治会役員の方が神明社についての歴史やいわれについて載せてくださっていたので、それを読んでみた。歴史は明治時代にもさかのぼる。神様がいらっしゃる本殿はなんと今も当時の姿を保っているそうで、町の人は神明社の神様を町の守り神として明治時代から今まで大事にしてきたそうだ。老朽化した社殿を地元の大工さんが建て直したり、参道が整備されたりして、少しずつ改修が進められた。そして今年、狛犬と灯ろうが奉納され、境内には地域の人の手でドウダンツツジが植えられ、神明社は見ちがえるほど美しく立派になった。それを記念してお祭りが行われ、私はそこで「豊栄の舞」を披露することになった。

春休みを利用して練習が始まった。熊野神社の宮司さんの奥さんが私に舞い方を丁寧に教えてくださった。友達と２人で動きを合わせるのがとても大変だった。正直あまり乗り気ではなく、練習がめんどうくさいと思っていたが、友達が頑張っているので自分も続けることができた。宮司さんの奥さんが「上手になったね。」とほめてくださり、私はなんとか無事に舞を全て覚え、いよいよ本番を迎えることとなった。

祭りの当日、信じられないくらいたくさんの人が集まっていた。巫女の衣装を着せてもらうと自然と身が引き締まった。大勢の町の人々が見守る中、私の出番となった。不思議と緊張はしなかった。「次はうでを伸ばして目線を指先に…」等、アドバイスされたことを思い出しながら舞っているうちに、あっという間に時間が過ぎていった。

今振り返ってみると、神明社の長い歴史の中に、このような形で自分も関われたことがすごいことだったと思う。「豊栄の舞」の歌詞には、神様への感謝や自然を敬う気持ちが込められているそうだ。小さな神社だけれどもこれまでたくさんの人が神明社の神様を大切にし、感謝の気持ちをこめて、苦労や努力を重ね、守りつないできたことを知って驚いた。そのおかげで、このお祭りがあるのだと思う。境内に咲くピンクのドウダンツツジの花が一段ときれいに見えた。これからも神明社を大切に守っていくことで、地域の人々の思いが受け継がれていくといいなと思う。